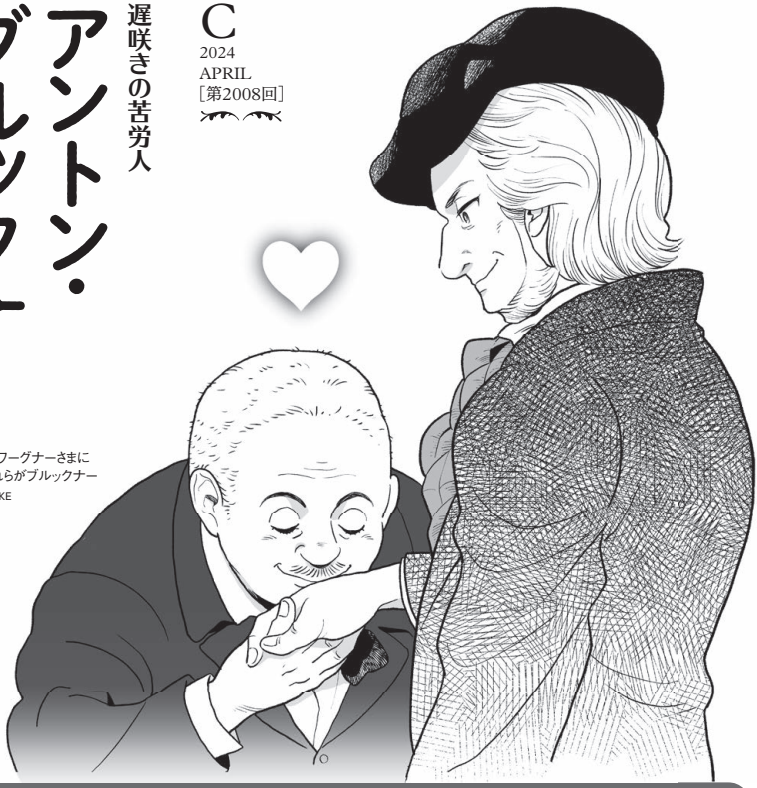
貧しいながらも音楽的な家庭で育ったブルックナー少年は、12歳で父を亡くし、そのまま合唱児童として修道院へ預けられた。自分の音楽的才能を地道に琢磨(たくま)しながらも、生活のために早くから働いたブルックナー。小学校教師を経て、オルガン奏者などを務めるかたわら、通信教育や年下の教師から作曲を学び終えたのは38歳の頃。習作を経て、ようやく《交響曲第1番》を完成させたのは41歳で、本日演奏される《第7番》の完成は59歳だ。音楽にも人生にも愚直で勤勉な態度は終生変わらなかった。

C
2024
APRIL
［第2008回］

遅咲きの苦労人

アントン・ブルックナー

Anton Bruckner (1824–1896)



大大大好きなワーグナーさまに
忠誠を誓うわれらがブルックナー
イラストレーション：©IKE

純朴なワグネリアン

ウィーンの都会的な空気に染まらず野暮なまま、気取らず控えめだったブルックナーだが、ひとたび話題がワーグナーになると饒舌(じょうぜつ)にならずにはいられない。新作の初演にはもちろん足を運び、本人(ワーグナー)を前にすれば舞い上がる。《交響曲第7番》でもワーグナーが考案した金管楽器（ワーグナー・テューバ）を使用するなど、ワーグナーへの愛があちこちに見え隠れしている。